

将来を誓い合った恋人

アッシュクフォルダー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

結城龍馬は、テニス界の新生児と呼ばれるほどの有名人だった。

そんな彼は、無実の罪を背負い、

アメリカの刑務所で過ごしていたが、

仮出所と同時に、追放を受けて、

アメリカから、日本に帰ってくるのだった。

そこで、彼は偶然にも、

将来を共に誓った恋人の望月穂波と再会する。

プロセカ小説シリーズ 第六弾です。

# 目次

第一話	星の光を見た犯罪者	2
第二話	背負う罪	6
第三話	二人でお茶会	11
第四話	ひと時の安らぎ	15
第五話	テニスのアニメ	20
第六話	結城龍馬の過去	26
第七話	結城龍馬のライバル	30
第八話	二人でお見舞い	35
第九話	休日の過ごし方	39
第十話	これからの未来	43
第十一話	しあわせ	47
第十二話	お弁当を食べよう	51

第十三話	小学生の思い出	55
第十四話	龍馬は咲希と一歌とデートする	59
第十五話	五人でデート	64
第十六話	龍馬のテニス指導	69
第十七話	龍馬はテニスのコーチ	





## 第一話 星の光を見た犯罪者

結城龍馬は、米国にある、刑務所の中で、過ごしていた。困ったもんだ。今日は月明かりが眩しすぎて眠れない。

いつものように決められた労働をして、

炭水化物とタンパク質を寄せて固めただけの、

夕食とも言えない夕食を終え、労働日報を書いて床に就いた。

これといった娯楽が与えられないこの監獄では、

することをしたらさっさと寝ちまう他無い。

だから俺はいつも労働と食事から戻ってきたら、

さっさと毛布にくるまってしまふのだが、

今日はそれができなかつた。雲のない空、

そして今宵は満月。鉄格子の形に切り取られ

床に映った月明かりを見ていたら、目が冴えてしまったのだ。

今日もその日のような静かな夜だ。俺は眠気がやってくるまで、

月明かりでわずかに煌めいている蜘蛛の巣をじっと見つめていた。

どこから侵入してきたのかわからないが、いつの間にか蜘蛛が入り込んできて大きな巣を張っていたのだ。わざわざこんなところに来て

巣を張らなくても、お前にはもつといい場所があるうにと思った。

その蜘蛛は少しの間だけ同居人だったが、虫がかからないとわかったのか、巣を放置してどこかへ居なくなってしまった。

あまりに立派な巣で壊すには忍びなく、そのままにしている。

そういえば、アイツは、蜘蛛が嫌いだったな。

思い出した瞬間に大きなため息が出てしまった。

女々しいことだ、また思い出しちまうなんて。

蜘蛛だけじゃない、何か虫が出るたびに、

俺に泣きついては逃がせ追い出せと言う、女だった。

そして俺が虫を追い出した頃にはケロツとした様子で、別のことを楽しそうに語っていた。そうだ、あの時も。

「見て、キレイな満月！」

「おいおい……夜に窓を開けっぱなしにすんな。

また虫が入るだろうが」

「それより、龍馬君も見てよ。ほら、テニスボールみたい！」

「…月をテニスボールに例える奴は初めて見たぞ。

第一あんたの国では月は白なんじゃねーのか？

軟式用のゴムボールじゃねーんだぞ」

「日本では黄色でしょ？」

「そりゃ…そうだが」

「ねえ、あれって手が届かないかしら？

丁度手で握れそうじゃない？」

「…やれやれだな」

気が付いたら俺も手を伸ばしていた。

あの日、あいつがやっていたように。鉄格子に阻まれた月の光に、

勿論手なんか届くはずがない。俺は自分の手をじつと見つめた。

何一つ守れなくて、何一つつかめなくて、その癖今も無駄に動き続ける、

ふがいない自分の右手を。そして俺は月明かりに背を向け、

目を閉じて毛布にくるまった。それでもあの光は、

ろくな明かりもないこの牢獄を、ろくでもない俺を、煌々と照らし続けていた。

困ったもんだ。今日は月明かりが眩しすぎて眠れない。



後日、そんな、罪を犯した俺は、  
仮出所が、決まってしまう。

そして、米国からの追放が決まり、  
日本に帰りざる負えなくなったのだった…

## 第二話 背負う罪

テニス界に、ある超新星が、存在していた。

彼の名は、結城龍馬

中学時代から世界で活躍し、

海外の大会でも優勝している、将来有望なテニス選手だったが、

テニス賭博に、巻き込まれてしまい、

もう「テニス選手」と呼ばれた自分は存在しないと語る。

高校生と思えない冷静さを持ち、

自らを傷つけたり人が殺されたりといった事に

すら感情を動かされない。

刑務所で刑期を終え、仮出所が、決まり、

やがて、米国から、国外追放を受けて、

日本に帰りざる負えなくなってしまう：

龍馬は、今 日本 の 空 港 行 きの 飛 行 機 に 乗 っ て いた。

日本に帰る時、何かしようとしたい訳じゃない

ひとまず、帰るだけだった：

強いて言えば、飼っていたネコが、心配だ、

米国に旅立つ前に、飼っていた、ロシアンブルーのネコが

元気になっているか、どうかくらいである

今のところ、日本にいる、恋人に預けているが：

大丈夫だろうか…？

龍馬は、日本にある、ある空港に、やって来るのだった：

俺は、タクシーに乗り、

飼っていたネコと、将来を誓い合った恋人がいる、

シブヤに向かうのだった：

(ここが、トウキョウのシブヤか、

五年ぶりに、やってきたな、

にしても、ミケと、あの子が、

元気になっているか、どうか、気になるところだが、

さて、どうするべきか)

ミケとは、龍馬が買っている、

ロシアンブルーのネコの名前である。

すると、龍馬は、一人の女の子を視線に捉えるのだった

「この子、どこかで、見たことがあるようで、

ないような……？」

龍馬の心の奥底から、懐かしい気持ちちが、

急に溢れてきた。

(どうしてだ？急に、心臓がバクバクしてきた……)

ひよつとして、アイツ……なのか？

望月穂波……そう、俺と将来を誓い合った恋人の名前。

穂波、居てくれたんだな)

穂波が、元気なのは、わかったが……

問題なのは、ロシアンブルーのネコである。

俺は、穂波に、気づかれないように、

そつと、この場から、去ろうとした、その瞬間だった

「龍馬……くん？」

「!？」

俺は、後ろを振り向いた：

確かに、穂波の声だった

彼女の姿が、俺の視線に入った。

小学生の時からだが、にしても、一言言つて、背が高くなつて、スタイルも良くなっている。

「龍馬くん…なの？」

「ああ、そうだ」

「龍馬くん！心配していたのよ！

もう、すつごく、すつごく、心配したいのよ！

ネットニュースでも、見てたけど、

本当に、日本に帰つて来たんだね！」

「おいおい、そんなに、驚くことか？」

「そうだよ！ああ…龍馬くんに、会えて…

私、嬉しい…」

「そうか」

「ねえ、龍馬くん、私の家に来ない？」

「まあ、いいが？」

穂波は涙を流して、俺に抱き着いていた。  
こうして、俺は、恋人である、穂波の家に、  
やって来るのだった：

## 第三話 二人でお茶会

星の形のお砂糖は特別だ。

そのままでもかわいいけど、お茶に沈む瞬間はもつと素敵だ。

形の崩れるまでの一瞬、カップのなかで砂糖は本当の星になる。

瓶一杯に入っている星粒を見るとわくわくして、

無くなるときが来るなんて思いもしていなかったのに、

あのわくわくがまだ新しいうちに、すぐ瓶の底は近付いてくる。

持ったときに持ってきたときより、

軽くなった瓶を棚にしまう度に、少し寂しくなる。

「何飲む？」

俺は少し考えたあと、ブルーマウンテンと、言った。

「なあに、今日はおやつつきたい気分なの？」

あのお砂糖は、琥珀色のお茶のなかにとけていくのが

一番きれいなものになあと思いながら、コーヒー豆の袋を開ける、恋人の穂波は、コーヒーはあんまり飲まないけど、この香りは好き。こんなにいい香りがあつまると、どうして、

あんなに苦くなるのかとても不思議だ。

「そういうんじゃねーよ、穂波だって、

いつもはミルクを入れるのに、今日はレモンティーだろ？」

「だって、ミルクを入れると、

お砂糖が見えなくなるでしょう？」

「随分気に入ったんだな。買ってやろうか？」

「ううん、いいの。だって、あんまり、

たくさんあるとありがたみがなくなるじゃない。

それに、龍馬くんはいつも、これがなくなる頃に、

買って来るんだもの。それが遠くなるみたいで、やだわ」

「じゃあ、もつと減らそうか？」

「だめ、そしたら使えなくなっちゃう！」

声をあげて笑う、俺を背に、お湯を注ぐとコーヒーの香りが強まる。



やっぱり良い香りだ。

「今度は、半分になる前には来るよ」

「ほんと？」

「ああ、レモンの合う茶葉も一緒に」

「じゃあわたし、香りのいいコーヒーを探しにいくわ」

こころごと話しているうちに、紅茶は蒸してきたし、

コーヒーは待つだけになった。

昨日焼いたお菓子、いつもよりは上手く出来たと思うんだけど。

龍馬が穂波の席に、一番お気に入り

ティーカップを出してくれてるのがすごく嬉しくなる。

淹れ終わったコーヒーの香りと

紅茶の香りが混ざって、喫茶店の香りがするみたいだ。

まだ飲みはじめでもないのに、こんなに楽しいお茶会も、

次は、いつやるか、わからない。

始まる前から終わるのが惜しい。

「少しちょうだい」

小さなティースプーンでコーヒーを掬ってみた。

スプーンに味がつくくらいすこしだけ

レモンの味と混ざって、不思議な味がするけど。

あんまり苦くなかった。でも、

やっぱり、あの素敵な香りの味とは違っていた

「うーん」

「美味いか？」

「あんまり、やっぱり紅茶が美味しいわ」

「次は紅茶にするかな」

「でも、龍馬くんがコーヒーを飲まないと、

コーヒーの香りが楽しめないからたまには飲んでね」

「ミルクと砂糖を入れれば、

穂波でも飲めるんじゃないか？今度甘いのをに入れてやるよ」

「ほんと？うんと甘くしてね」

「コーヒーを飲んだあとの紅茶は、やっぱり少し甘く感じた。」

## 第四話 ひと時の安らぎ

結城龍馬は、通信制高校に通っている。

この前出会った、宵崎奏とは、

同じ通信制高校だった。

龍馬は、週に二日、学校に登校しているのだった。

こんな、彼にも、婚約者がいた

望月穂波 Leo/needという、バンドで、

ドラムをしている。

昨日は、そのライブを観に行ったのだった。

龍馬は、思うのだった。

婚約者である、穂波が、輝いている所を

目の当たりにすると、

自分は、何なんだろうって、思ってしまうのだった…

「龍馬…くん？」

「なんだ？穂波」

今は彼女とのランチに行っていた。

元はデートのはずだったが、

あまり、朝食を食べていない、

一応、食べたのだが、

食べたとしても、パン一枚ほどであった：

という訳で、穂波の意見もあつてか、

近くの、レストランにやつて来たのだった：

「お値段が、お手ごろだし、

ここが、いいかな？」

「ああ、いいと思うぜ？」

俺も、穂波と一緒にいるだけで、

今は、幸せだ」

「龍馬くんは、凄いいよね…」

冷静で、いろんな意見が持てて…

周りに流されやすい、自分とは、大違いだよ」

変わりたいと願う、穂波に、龍馬はこう言った…

「無理して、変わろうとはするな、

俺が好きになったのは、今の、この瞬間の  
穂波だから」

「大人だなあ…龍馬くん」

と、言っても、俺は、そこまで、大人じやない

大人になろうと思って、無理をした結果が、

今の俺かもしれない。

いくら、婚約者とはいえ、穂波には、自由に生きて欲しい

そして、食事を済ませた後…

「美味しかったね」

「ああ、そうだな」

レストランから出て、公園で、のんびりしていた…

穂波の笑顔も、その優しさも、変わっていない、

変わっていていたのは、俺だけだった。

無実の罪で、警察に捕まり、

その罪を背負って、流れていた時間は、

龍馬の心にも、残っていた。

穂波が知らない、闇や、汚さ、冷たさを、

知ってしまった、俺は、恥ずかしいと感じるのであった…

(そんな、俺が、これからも、ずっと、

この先も、穂波の隣にいてもいいのか?)

穂波には、綺麗なまま、生きてほしい、

それは、俺自身の我儘になってしまいが、

それを叶えるためには、自分自身が、不安分子で、

邪魔な存在かもしれない。

そう思ってしまうと、将来を誓い合ったはずの

関係を断ち切ろうと、思っても、

それも、容易いことでは、決してないのだった。

「ねえ、龍馬くん、ボーツつと、しているの?」

大丈夫?」

「すまない…つい、ボーツとしていた

考え事でもしててな」

「そっかー」

「散歩でも行くか」

「龍馬くんが、散歩? 珍しいね」

「そうか？」

「そうだよ！普段、そんなことしないのに！」

「そうか…」

二人で散歩に出かけるのだった…

## 第五話 テニスのアニメ

結城龍馬は、高校一年生の15歳だ

この間は、彼女をランチに誘い、

注文された、イタリア料理を、

美味しく食べていた。

今、あることが、気がかりになっている

龍馬は、今の所、住居不定のままであり、

穂波の家に、居候している状態である。

事実上、同棲している、状態である。

しかしながら、こんな、無実の罪を背負った

この、結城龍馬が、

望月穂波を、幸せにできるのか？

その可能性は、非常に低いと、考えている。

何故なら、彼女まで、危険な目に遭う事も、

想定している。



仮に、穂波に、いい人が見つければ、それで、いいと考えることもある。

そんな、ある日のことだった。

「ねえ、龍馬くん、これ、あげる！」

「なんだこれは？ チケットか？」

「うん、テニスのアニメの映画のチケットだけど、

観に行かない？」

龍馬くん、テニス選手だったじゃん」

「それも、そうだが……」

俺は、考えるのだった。

少し前までの俺は、栄光に浸っていた男だった。

全米のテニス大会で、ほぼ優勝して、

一時、メディアや、マスコミのトップに出るほどの

有名人だった

だが、今は違う、テニス賭博に巻き込まれて、

無実の罪をかぶせられて、警察に逮捕され、

釈放後は、日本に帰ることになった。

「穂波は行くのか?」

「ううん、私はバンドの練習があつて、

本当は、龍馬くんと、観に行きたいけど、

でも、別の人に頼んでももらうことにしたの!」

「それは、誰?」

「宵崎奏さん」

「ああ、あの人か…」

「奏さんに、頼んでもらつて、

龍馬くんとデートに行くことになったの!

奏さん、出不精だから、

龍馬くんが、しつかり、エスコートしてあげないとね!」

「おいおい、どうして、俺が、そういう

面倒な事、しないといけないんだ?」

「龍馬くんも、ヒマでしよう?」

「まあ、そうだが、うかつに、外に歩くのは…」

「大丈夫だつて! 日曜日、奏さんの家に向かつてね!」

「しょうがねえな…」

俺は、渋々、了承を得るのだった。

それから、日曜日になり…

「えつと…奏？」

「結城さん？」

「ああ、結城龍馬だ」

穂波の言う通り、奏の奴を、

適当に、歩きまわしておかすか…

「それじゃあ、行くか」

「どこに行くの？」

「映画だ」

「何の映画？」

「穂波に聞いたところ、テニスのアニメらしい」

「ふーん」

「まあ、アンタの好きそうなものじゃねえけど、

観に行けど、言われたからな…」

「わかった…にしても、眩しい」

「太陽が、眩しいのか？」

何となくだが、わかる気がするぜ」

「どうして」

「俺も本当は、太陽の下を、堂々と歩けないような

人だからな」

「そうなんだ」

「まあ、少し喋り過ぎたな、

さて、映画でも楽しむか…」

「そうだね」

龍馬と奏は、テニスのアニメ映画を見るのだった。

「こんな、作り物の映画を見ていたら、

無性にテニスが、やりたくなってきたぜ…」

「結城さんは、テニス選手なの？」

「ああ、一応な、元テニス選手だったんだ」

「そうなんだね。早く帰りたいな…」

「そうか、どっちでも、いいけどな」

映画を鑑賞したの、

二人の会話は、途切れ途切れの状態だったが、  
会話が続くのだった：

## 第六話 結城龍馬の過去

俺は、結城龍馬、通信制高校に通いながら、  
婚約者である、望月穂波の家に、

訳アリで、居候している、高校一年生の15歳だ。

穂波の家に、居候して、早二週間が経とうとしていた。

「俺は、これから、どう生きたらいいんだ

って、悩んでいても、仕方ないことか…

ただただ、時間が流れていくだけ…」

「どうかしちやったの？龍馬くん？」

「いや、独り言だ、気を悪くさせちやったな」

「ううん、龍馬くんって、昔から、

抱え込みがちだから、わかるよ、そういうこと」

「そうか、俺も、まだまだだな」

「龍馬くんって、テニスやっていたよね？」

その話が、聞きたいな」

「前にも、話していただろ？」

「まあ、そうだけど、でも、興味が無い訳じゃないけどね…」

「素直な奴だな…まあ、いいぜ、テニスのことだな、

さて、穂波に、まだ、言っていないことは…

先輩の話だな」

「龍馬くんって、中学の時、

アメリカに住んでいたよね？」

「一応そうだ、イジメに遭いそうになったけど、

それも、テニスのおかげで、遭わなくなった」

「じゃあ、龍馬くんの、中学時代の、

チームメイトや、部活の仲間は？」

「そう言えば、いたな…」

最も印象に残っているのは、あの人だな…」

「あの人？」

「テニス部の部長だ

あの人の、ゾーンを打ち破ることができなかったのが、

心残りだったかも、しれねーな」

「ゾーン？」

「その場を、全く動くことなく、

相手の球を、打ち返し続ける技だ」

「そんな事が、出来るの？」

「出来てしまうのが、部長って人だったんだよ

俺も、世界的に活躍するスター選手といっても、

まだまだなんだよな

なにしろ、同じ部に、天才って、呼ばれている

先輩もいたからな、あの人の繰り出す、カウンター技

笑顔の裏で、何考えているか、わかんねー

実に、らしいもの、ばかりだったぜ

そうだ、何考えているのか、わかんねーと言えば、

あの、先輩もいたな

何考えて、あのドリンクを作っていたのか、

飲まされた時、死にそうだったぜ」

「死ぬような…ドリンク!?!」

「先輩が言うには、ただの、野菜ジュースだが、



味も色も、明らかに、ヤバいんだよ」

「龍馬くんの中学時代の、先輩って、

個性的な、人たち、ばかりなんだね」

「よく言うぜ、にしても、

本当に、退屈する暇もなかったくらいだ

中学の時はな…だが、無実の罪を背負って、

通信制高校に通っていて、

拳句の果てには、穂波の家に、居候している

滅茶苦茶だな…俺の人生」

「でも、それは、それで、波乱に満ちている気がする」

「よく言うぜ、はあ…俺も、まだまだだな…」

結城龍馬は、少し喜ぶような、穏やかな表情で、

どこかで、悲しむような、表情をして、

部屋に戻るのだった。

## 第七話 結城龍馬のライバル

龍馬は、暇そうに、穂波と会話を楽しんでいた。

「なあ、穂波」

「どうかしたの？龍馬くん？」

「また、聞きたいだろ？俺の中学時代の話？」

「そうだね、聞いてみたいなー」

「って、前から、そう思っていたんだ」

「よし、じゃあ、そうだな…」

「印象に残っている奴が、何人もいたな…」

「印象に残っている人？」

「昨日話した、部長の事、覚えているか？」

「ゾーンって、技が使える人？」

「その部長に勝った奴がいる」

「えっ？ゾーンを破られたの？」

「そうだ、そいつの使う技は、対戦相手の弱点を

見抜く、インサイトさ、

それを、駆使して、相手を徹底的に叩きのめす

その姿は、まさに、コートに君臨する、絶対君主

帝王つて、恐れられていたんだ

他にも、神の子とか、皇帝とか、

妙な異名を持つ、練中もいたな…」

「そんなに、凄い選手がいたの？」

「ああ、神の子の技は、特に厄介だったぜ

対戦する内に、五感を奪われ、

最後は、立ち上がる事すら、出来なくなるのさ」

「五感を!？」

「皇帝の技は、奥義、風林火山だったな

一度対戦した後、さらに、進化して、

真の奥義を習得したのは、驚いたぜ」

「テニスなのに…奥義？」

「まあ、誰しもが、己の全てを賭けて戦い、

敗れ、その分、強くなっていく…」

俺がいたのは、そういう世界だったんだ」

「テニスの領域超えていない？」

「自分だけの常識だけで、物事を語るなんて、

そりや、やっては、いけないことだぜ？」

「そ、そうだね…」

「じゃあ、楽しかった？」

「なんで、そう思う？」

「だって、テニスの話をしている時の龍馬くんって、

楽しそうに話していたじゃん」

「そうだな、つまんねーとは、言えねーな

だが、終わった話なんだよ…」

「いつか、龍馬くんの試合観に行きたいな、

そう言えば、一度も観たことなっかんだよね、

龍馬くんが、テニスの試合をしている姿！」

「俺にまた、プレイしろって、事か？」

「それは、無理は相談だな」

「いや、その、龍馬くんの試合も、観たいけど、

他の選手の話聞いていたら、

「何だか、観戦したくなっちゃって！」

「まあ、知り合いに、話を付けて、

見学できるように、話は、つけてやるよ

言っておくが、俺は、観に行かねーし、

やらねーぞ？」

「そ、そうなんだ…」

「どうだ？これが、俺の中学時代の内容だ、

まあ、穂波が、聞きたかったのは、

そういう事だろ？」

「う、うん…」

「今は自分の生きる道を探さねーといけない」

「そうかな？」

「どういうことだ？」

「だって、龍馬くん、また、テニスやりたいって、

顔に書いてあるじゃん」

「そういうことか、俺もまだまだだな…」

何がともあれ、龍馬の過去が、わかつた気がする…

## 第八話 二人でお見舞い

結城龍馬は幼少の頃から、

テニスを毎日、コツコツと、練習と努力を積み重ねて、

やがて、テニスの超新星と、呼ばれるようになった。

彼は、小学生の時に、望月穂波と、出会い、

やがて、現在は婚約者になったのだった。

彼は、中学の時、アメリカの学校に転校することになり、

穂波と、別れることになった。

そんな彼は、中学時代から、テニス界で活躍するようになり、

全米のテニス大会を総なめするほどの、実力にまで成長するのだった。

無実の罪で、アメリカの警察に捕まり、

中学の時から、高校に入る時まで、

彼は、服役しているのだった。

そして、アメリカからの追放を受けて、

永住権の権利も、はく奪されて、

アメリカ国籍まで、奪われるのだった。

その後、龍馬は、数年ぶりに日本に帰国

将来を誓い合つた、望月穂波と、再会するのだった。

それと同時に、通信制高校に通うことになり、

現在、身元を隠しながらも、望月穂波の家に居候している。

今日は、月に一度、待ちに待つた、デートの日です。

「穂波、待つてたぜ」

「龍馬くん！おはよう！」

もう、大丈夫だよ、下に降りるね」

愛らしい足音が、聴こえてきた。

目を向けると、かわいらしいワンピースに

身を包んだ、穂波が、龍馬の前に現れるのだった。

「今日は、どこに行く？龍馬くん？」

「そうだな…久々に、穂波の友達に会いに行きたいな」

「じゃあ、行こつか！病院に！」

「病院？ああ、あの子の事か…名前は、なんだっけ？」

「天馬咲希ちゃんよ、まあ、覚えていなくても、



無理ないか…じゃあ、行こっか」

「ああ」

二人は、天馬咲希の病室へと、向かうのだった。

「ほなちゃん！えつと、隣にいるのは…？」

龍馬くん？」

「よく覚えていたな」

「龍馬くんの話が聞きたいな！

ほなちゃん、何か知ってる？」

「うーん、龍馬くんの話か…」

「どれも、変わった話だったり、個性的な話だったりするからな…」

「まあ、一言言つて、退屈はしなかったな」

「そうだったの？」

「海外のメディアは、連日、俺を取り上げていた

それくらい、有名になったこともあったが、

今は違う、俺はスター選手の成れの果てさ」

「でも、龍馬くん、また、テニスやるの？」

「やらないな…もはや、テニスなんて、したくないんだ」

「どうして？」

「何でもだ」

「そっかー」

「じゃあ、試合を観に行きたいな！」

「知り合いに、言ってきた、話を付けてやるからな」

「まあ、いつかは、試合に連れてってやるさ」

「でも、俺は、しないけどな」

「そうなんだ…」

「まあ、テニスで心残りになったことは、ある、

でも、もう、捨てたんだ」

「今は…未来を見るしかないんだ」

「例えば、それが、受け入れられない、現実だったとしても」

「なんか…ネガティブになつてない？」

「そうか、俺もまだまだだな」

「龍馬は、寂しそうに、咲希と穂波に、別れを告げて、

先に帰るのだった。」

## 第九話 休日の過ごし方

龍馬が帰宅すると…

「ただいまー」

(彼女が走って玄関まで来てくれた)

「遅くなつて、すまなかつたな」

玄関まで来てくれて嬉しいぜ…ありがとな!

「龍馬くん、お風呂の用意が出来たから、先に入つてて!」

「ああ、わかつたぜ」

龍馬はお風呂から上がり、

着替えるのだった。

「じゃーん(っ)座るぜ?」

今日は、せっかくの休日だったのに、

急に学校に通うことになって、寂しかったなあ」

「お疲れ様、また今度の休日は一緒にデート行こうね！」

「どこがいいかなあ。」

カフェとかでゆつくりお茶するのもいいかもな」

「一緒にクッキー食べながら紅茶飲んだり：」

想像しただけで楽しいね！」

23時になり、ベットに着いた

「よし。じゃーベットにごろんしよつか。よいしよ」

「おいおい、男子高校生と女子高生が、

一緒に部屋で寝るのは、ちょっと、マズいんじゃないのか？」

(穂波がぎゅーしてほしそうな目してる)

「ん？どうした？」

そんな可愛い目でこっち見てきて」

「龍馬くんを抱きしめたい」

「おいおい、俺はマスコットじゃねえから！」

「いいでしょう…？お願い！」

「しようがねえなあ…」

「ねえーねえーこんな可愛い子が幸せそうに顔とろけてるの見たらさ

キスしたくなっちゃうじゃん！ねえーキスしていいっ？」

「それは、無理は話だな」

「ねえ、なんで！お願いっ!!」

(キスタイム)

「龍馬くん、顔真つ赤つか、リンゴみたい！

キスできて幸せっ。このままぎゅーして今日寝ようね！」

「それは、さすがに、恥ずかしいぜ…」

「俺も眠くなってきたし、明日も朝早いから寝るから

その…今日もめちやくちや可愛かったよ。おやすみ」

「そ、そうかな…？」

「ごめんね…私のワガママに付き合わされて…」

「いいんだ、穂波は、俺の婚約者だからな」

「龍馬君、頼りになる—

あつ、明日、咲希ちゃんが、龍馬くんに

テニスを教えてほしい！って、言っているから、

会いに行ったら？」

「ああ、いいぜ、わかった」

「じゃあ、お願いね！」

「ああ、おやすみ」

結局のところ、別々の布団で寝ることになった。

翌日 龍馬は、咲希に、テニスのやり方を教えるのだった。

「どうだ？ 咲希、上達したか？」

「うんっ！ 龍馬くんって、教えるの上手だね！」

「まあ、一応これでも、プロのテニスプレイヤーだったからな

っこれくらいは、教えられるさ」

「頼りになる——！」

「それ、穂波にも、言われたぜ？」

「へえ、ほなちゃんからも、頼りにされているんだね！」

「ま、まあな……」

「じゃあ、次は、打ち方を教えてほしいな！」

「ああ、いいぜ」

テニスの指導が、しばらく続いたのだ……

## 第十話 これからの未来

結城龍馬は、望月穂波と会話をしていた。

「おい、穂波」

「どうかしたの？龍馬くん？」

「また、この俺にテニスをやらせたいんだらう？」

「えっ？」

「この前なんか、咲希に、コーチまで、

頼まれて、大変な目に遭ったぜ、

まあ、あくまで、形だけ、教えたけどな」

「龍馬くん、もう、テニスはしないの？」

「いいか？俺はもう、テニス選手じゃねえ、

そのなれの果て、抜け殻なんだ。

俺はもう、過去を捨てたんだ」

「本当に全部捨てたの？私も含めて！」

「さすがに、穂波や咲希とかは、

捨てたくはなかった、いや、これから先もだ、  
捨てるつもりはない」

「背中には自分には、見えないんだよ？」

そこには、捨てたつもりなのに、

引つかかっているのが、あると思うんだ

心当たりとかある？」

「あると言ったら…あるな…」

テニスであつちやならねーんだ

すべて覚悟の上で、俺は、やったんだからな…」

「覚悟の上？それって、どういうこと？」

「まあ、心残りのある、アイツの事かもしれねーな」

「えっ？」

「俺には、穂波、アンタだ、将来を誓い合っているだろうが」

「うん…そうだけど？」

「最初の方は、恋愛は理屈じゃない、

なんて、戯言とか、言っていたけどな」

「そうだったんだ…」



「どうして、俺は、穂波を選んだんだ

そして、穂波は、どうして、俺を選んだ

って、ことに、悩むこともあった」

「それは…前から、ずっといたから？」

「小学生の時だけだろ？」

咲希や一歌、それに、志歩とも出会って、

まあ、退屈は、しなかったな…」

「そうね、小学生の時は、そんなに、退屈じゃなかったね」

「今思うと、誰もが、俺とかかわると、不幸になるかもしれない

言っちゃえば、厄病神だ、俺は」

「そんなことない！龍馬くんは、立派に生きているじゃない！」

私が、毎日、愛情たつぷりに、料理やお弁当作っているし！」

「わかつてはいる…その気持ちは、

無駄にしてくねーな」

「だったら！なおさら、私と咲希を捨てないで！」

「おい、待て、捨てるとは、言ってないぜ？」

「そうだった、ごめん、熱くなっちゃって…」

「いいんだ、俺も、そういう時もあった

でも、今は違う、穂波や咲希、

それに、一歌や志歩もいるから

頑張れるかもしれねーな」

「龍馬くん…」

「その、俺にも出来ないか？

穂波の手伝いとか？」

「うーん、じゃあ、宵崎さんの話し相手とか、どう？」

「宵崎…？ああ、あの子か」

「今度、一緒に、外に連れってたら、どうかな？」

「まあ、考えて置くぜ」

「うん！ありがとう！」

「礼なんて、いらねーぜ」

こうして、望月穂波の提案によって、

宵崎奏とデートする約束をするのだった。

## 第十一話 しあわせ

もうすぐ、夏になるというのだが、

その前に、春の話を、一度だけしよう。

桜の花びらの動きは不規則だ。落下速度は、

そこまで速くないけれど、まるで逃げるように

ひらりひらりと身をひるがえす。

それを追うように穂波の身体が一生懸命に

右へ左へと揺れるのを見るのは、少し愉快だった。

穂波に言われて、軽い気持ちで手を伸ばすと、

思いのほかあつさりとして桜の花びらが左手におさまる。

普段からテニスで軌道が変化する球をよく見ているせいか、

動体視力とそれに見合った身体の動きが身についている証だろう。

続いて2、3度そのまま手を伸ばすと、次から次へと桜が手に入る。

「……意外と取れるな」

「えっ、龍馬くん取れたの!？」

振り向いた彼女が驚いた顔で俺を見つめる。

「桜の軌道をよく見ろ。そしてこうっ…素早く取れ」

「手の動きが速すぎて分からないよ…」

アドバイスをしながら実践してみたものの、どうも上手くいかないみたいだった。そうこうしているうちに桜並木の通りは終わりを迎え、

上に行くための階段が見えてきた。

「うーん、駄目だったな…やっぱり難しいね」

残念そうに笑う穂波の横顔を見上げて、

俺は自分の両の手にある沢山の桜を見つめた。

歩きながら動体視力の訓練がてらに取っていたら、

思ったよりも集まっていたのだ。

—こんなに幸せが欲しいのだろうか。こんなにも…いや、

「そこで止まってな」

「龍馬くん？」

突然ジャンプして階段を3段上がった俺を見て、

彼女が不思議そうな声を出す。振り返って向き合おうと、

やっと少し、俺が穂波の背を越す程の高さになっていた。

「思えば俺はな、穂波がいれば十分幸せなんだ」

「えっ」

「だからこれは、やるよ」

言い終わると同時に、そつと握りしめていた両手を開く。

零れ落ちるのは、俺の小さな手のひらにおさまる程度の桜の花びら。

ちよつど風が吹き、穂波の頭上を、顔の横を、花びらが飛んでいく。

「あつ、ちよつ、ちよつと！」

慌てて、穂波が桜を掴もうとする姿に

小さく笑みを浮かべて、俺は踵を返して階段を上がり始める。

「ほ、龍馬くん、待って！」

何段か上がった所で、声がして背中を叩かれる。

「どうだ、一枚くらいは……」

強引に片手を掴まれ、何かが手のひらに押し付けられる。

見てみるとそれは一枚の桜の花びら。驚いて顔を上げると、

穂波のもう片方の手も一枚の桜があった。

「せつかく取れたのに勿体ないことするんだから！」

でもね、両手で挟んでみたら偶然2枚、一緒に取れたの！

だから一枚あげる」

「そうか、良かったな。だが、俺は別に幸せはいらない。

穂波や、一歌にあげた方が……」

「私は龍馬くんに持つていてもらった方が嬉しいの！

し、幸せは、好きな人と分け合いたいから……」

触れられている手に力がこめられるのを感じる。

「あんたにそこまで言わせちゃうなんて、俺もまだまだだな」

俺はそつと反対側の手に桜を持ち替え、触れられている方の手で穂波の手を握ったのだった。

## 第十二話 お弁当を食べよう

高く上げたボールに視線を合わせた。

「今だー！」

ラケットに溺れるボールの感覚の次には、

聞き慣れた軽快な音と共に、軌道に乗ったボールが、

コートを貫く。

「サービスエースだ！」

実況者の声と共に、試合終了のアイズが聞こえた。

「龍馬くん、これが、テニスの試合なんだね」

ふんわりと、包み込むような声に、

感じていた疲れの存在も消えていった。

「ああ、そうだけ、咲希、

だが、本物のテニスは、もっと高い次元で行われるんだ」

「高い次元？」

「ああ、そうだ、ツイストサーブ、ドライブA、ドライブB、

ドライブC、ドライブD、無我の境地、天衣無縫の極み、

サムライドライブ、光る打球、全部、俺の得意技だ」

「なんかすごいね！龍馬くん！

でも、なんで、テニスしないの？

あんなに、上手なのに？」

「過去の栄光を捨てたのさ、後ろを見たくないんだ、

今は、前を向いて、歩きたいんだ」

「なんか、カッコいい！龍馬くんって、カッコいいよね？

背は小さいけどー！」

「身長なんか、気にしたことねーぜ」

「えっ？そうなの？それは、なんか、意外…」

「意外か？別に身長がチビでも、こうやって、テニスができるんだ、

支障をきたすことは、一度もなかったな」

「へえ、そうなんだね！

じゃあ、これからも、アタシに、テニス教えてくれないかな？」

「咲希の頼みならば、いくらでも、教えてやるさ」



まあ、実際やるのは、咲希自身だからな」

後日、テニスコートにて、

結城龍馬にしごかれながらも、天馬咲希は、

テニスの練習に励んでいた。

「でも、なんで、ソフトテニスなんて、始めたんだ？」

「えっ？なんか、青春っぽいじゃん！」

「おいおい、それだけかよ……」

すると、穂波がやって来て……

「あつ、咲希ちゃん！龍馬くん！お疲れ様！」

「あつ、ほなちゃん！」

「穂波か、どうした？」

「お弁当作って来たんだ、よかつたら、食べない？」

「おつ、すまねーな、じゃあ、休憩にはいるか」

「はーい！」

穂波は龍馬にお弁当を食べさせようとしていた

「龍馬くん！はい、あーん！」

「おいおい、よせよ、俺は子どもじゃねーんだから…」

「えーっ？いいじゃん！婚約者でしょう？」

「じゃあ、アタシからも、あーん！」

「咲希まで…」

龍馬は異常なまでに、モテモテハーレム状態だった。

「そう言えば、龍馬くんは、硬式テニスやっていたみたいだけど、

ソフトテニスもできるの？」

「まあ、多少はな、飲み込みが早いだけだ」

「へえ、龍馬くんって、何でも、出来るんだね」

「球技以外は、出来ねーんだよ、俺は」

「ふふっ、龍馬くんったら、

昔から、球技の才能があっただよ？」

「今更、気づくのかよ…やれやれだな」

穂波と咲希は、龍馬にお弁当を食べさせるのだった…

龍馬自身は、嫌がっているが…

## 第十三話 小学生の思い出

結城龍馬は、幼馴染の星乃一歌と天馬咲希、望月穂波、日野森志歩と、一緒に、お花見に行くのであった。

「お前たちは、元気だな…」

「龍馬くん！こつちこつち！」

「つたく、咲希つたら…」

「龍馬くん、なんか、元気がないね？」

「どうかしたの？」

「穂波、何でもねーよ、

ただただ、咲希が、元気そうで、

こつちまで、元気になってしまいそーだぜ」

「龍馬らしいね」

「勝手に言っておけ」

「あつ、ここにしない？」

五人で、レジャーシートを敷いた。

「春だね、龍馬くん」

「ああ、何だか、小学生の頃を思い出すな」

「小学生の頃……？あー龍馬くんを巡って、

あたし達、Leo/needの四人が、取り合っていた時だね」

「懐かしいね、あの時は、私たち、

みんな、龍馬くんのが好きだったんだね、

志歩ちゃんも、一歌ちゃんも、咲希ちゃんも、

みんな、龍馬くんに夢中だったよね！」

「そんな、時期があつたな……」

「だって、龍馬くんって、あの時、可愛い見た目をしていて、

中身がカッコよかつたし！

それに！あたし達のこと、いつも、気にかけてくれて、

助けられたこともあつたからね」

「そうそう、咲希と穂波が、イジメられていたところを、

龍馬が助けてくれたんだよね？」

「アイツらが、気に入らなかつただけだ」

すると、咲希が、龍馬のほっぺを、ツンツンしながら…

「またまた〜本当は、あたし達に、

モテたかつたんでしょ〜?」

「ツンツンするなよ…後、そんな気持ちは微塵にもねー」

「でも、龍馬が助けてくれたところ、

今でも覚えているし、イジメっ子たちを撃退するところ、

カッコよかった、ありがとう」

「おいおい、志歩、礼を言われると、照れるし」

「あつ、いっちゃんのは初恋の相手って、龍馬くんだったね?」

「そ、そうだけど…?」

「じゃあ、告白しちゃう?」

「でも、穂波と将来を誓い合っているし、告白なんて、出来ないよ…

それでも…好きだけど…」

「気持ちだけ、受け取るぜ」

「ありがとう、龍馬くん」

「あつ、そろそろ、お弁当食べない?」

腕によりをかけて、作って来たの!」

「じゃあ、龍馬くんに食べさせようよ！」

「おいおい、そんな趣味は、ねーよ」

穂波が、お弁当を取り出して、

咲希や一歌が、龍馬に、お弁当を食べさせてあげるのがだった。

「龍馬くん、あーん！」

「おいおい、よせよ……」

「わ、私からも……あーん」

「仕方ねーな」

咲希と一歌が、龍馬にお弁当を食べさせるのがだった。

「じゃあ、次はほなちやんの番だよ！」

「えつと……あつ、あーん！」

「はあ……やれやれだぜ……」

穂波はお弁当のご飯を、龍馬に食べさせてあげるのがだった。

## 第十四話 龍馬は咲希と一歌とデートする

結城龍馬は、ある二人の女の子を待っていた。

天馬咲希と星乃一歌だ。

龍馬は穂波の婚約者ではあるが、

別に浮気ではない。これだけは、言えるのだ。

「あつ！龍馬くん！」

「龍馬くん！」

「おつ、咲希に一歌じゃねーか」

「今日は、龍馬くんとデート！」

小学生の日以来だなく！」

「うん、そうだね」

「だって、龍馬くんって、

背が小さい割に、カッコいいし、

男らしいし、ちょっと、カワイイ部分もあるし！」

「おいおい、褒めすぎだぜ…照れるだろうが…」

「照れてる、龍馬くんも、カワイイ！」

と、咲希が龍馬に抱き着いた！

「ちよ、ちよつと、やめろ…人前だぞ？」

「アハハ…ごめん！ごめん！じゃあ、行こつか！」

「ああ、そうだな、で、どこに行くんだ？」

「タピオカシヨップに行きたいな！」

新作のタピオカが、売っているんだ！」

「それを買うに行くんだな」

「うん！それじゃあ、レッツゴー！」

三人は、タピオカシヨップに来店した。

咲希曰く、ここは、結構、評判が良いとの事。

「あたしは、トロピカルタピオカ！」

「いっちゃんど、龍馬くんは？」

「私は、マンゴータピオカかな？」



「俺は、イチゴのタピオカにする」

三人はタピオカを食べて飲むのであった。

「うーん、やっぱり、美味しい！」

「タピオカなんて、初めて飲んだぜ」

「えっ？ そうなの？」

「ああ、普段は、ブドウの、炭酸飲料水が、

好きだからな」

「へえ、そうなんだね」

「それで、感想は？」

「まあ：悪くない味だぜ？ 嫌いじゃないぜ」

「もう！ 龍馬くん、つまり、好きってこと？」

「そこまでって、程じゃねーけど、

少なくとも、俺の口には合っているぜ？」

「じゃあ、龍馬くん、アタシに、

またテニス教えてよー！」

「またか？ 仕方ねーな、

言っておくが、俺はテニスは、もうやらねーぞ」

「えっ、龍馬くんって、テニスやらないの？」

「過去は、もう捨てたんだ、

テニスなんて、やりたいって思いなんぞ、もう、ねーな」

「そういつて、龍馬くん、アタシにテニス教えている時、

夢中に教えていたくせに〜！」

「そ、それは…咲希が、教えて欲しいいつて、言うから…」

「フフツ、龍馬くんって、優しいね」

「ま、まあ…」

と、結城龍馬は、また照れだした。

公園にて…

「龍馬くんって、ほなちやんと一緒に暮らしているみたいだけど、

普段の、ほなちやんって、何しているの？」

「何もしてねーよ、俺が知った事か」

「婚約者なの？」

「ああ、俺は穂波の知らない部分もある、

でも、俺は穂波を愛しているんだ、

まあ、家事にバンドに忙しいんじゃないかねーのか？」

「やっぱり、そうなんだね」

「そういうところだな」

三人のデートは、続くのであった。

## 第十五話 五人デート

結城龍馬は、星乃一歌、天馬咲希、望月穂波、日野森志歩と一緒に、五人でデートに出かけることになった。

「ねえねえ、龍馬くん！」

「こんなに、カワイイ女の子達とデートが出来るなんて、

龍馬くんって、幸せ者だね〜！」

「オイオイ、よせよ、俺に、そんな趣味はねー」

「五人で遊ぶなんて、久しぶりだね」

「うん、何だか新鮮な体験」

「ねえ、どこに行く？」

「あつ、気になる、お店があったんだ」

「えっ？志歩ちゃん、

気になるお店って…」

五人が辿り着いたのは…ラーメン屋だった。

「ここは…」

「にここにラーメンって、お店だよ、

前から気になっていたんだ」

五人は、そのラーメン屋に来店した。

（いらつしやいませ！五名様ですか？）

「うん、五人」

（テーブル席に、どうぞ！）

「それじゃあ、私は、豚骨ラーメン」

「じゃあ、同じの」

「あたしも！」

「私も！」

「…俺も、同じので」

（豚骨ラーメン入りました！）

こうして、五人で豚骨ラーメンを食べるのだった。

「この店って、美味しいの？志歩ちゃん？」

「安いからね、ラーメン初心者にオススメのお店だよ、

豚骨ラーメンが、6000円で食べられるからね」

「へえ〜それって、安いなの？」

「普通のラーメンだったら、700円以上は、ザラだよ？」

高いラーメンで、3000円」

「俺達が、食っている、600円の豚骨ラーメン、

5皿分じゃねーか」

「でも、値段が安い割には、美味しい」

「へえ〜そうなんだね」

こうして、五人は、別々に会計を済ませて、

ラーメン屋を退出した。

「お昼ご飯のラーメン、美味しかった〜」

「うん、これは、満足だった」

「それにしても、ラーメンなんて、いつ以来だ？」

「初めて食った気がするぜ？」

「龍馬くん、そうなの？」

「テニスやっている時は、カロリーとか、制限したり、食べ物に、気を使ったりしていたからな、

オーガニックとかに、拘っていた時期もあった、でも、俺はクレープジュースが好きだが」

「へえ、そんな部分もあるんだ」

「まあな、でも今は、テニスは、やらねーから、

事実上、好きな食べ物が食べられる状態だからな」

「そうなんだね」

「あつ、龍馬くんも、私たちのライブ、

観に来てよ！」

「気が向いたらな」

「こーやって、遊んだの、小学生の時以来かな？」

「そうだな」

「小学生時代のアタシ達は、龍馬くんを巡って、

熾烈な争いが、繰り広げられていたからね、

それで、その勝者が、ほなちゃん！

ほなちゃんは、龍馬くんと将来、婚約することを誓ったのだった！」

「オイオイ、勘弁してくれよ……」

「でも、龍馬くんが、私を選んだ理由って、覚えている？」

「覚えているぜ？」

俺は……穂波の全部が好きだ」

「えっ、それだけ？」

「他に何かがある、俺は穂波に惚れて、告白をした、

それだけのこと、じゃねーか」

「そう……だね……」

「私だって、龍馬くんのこと、好きだし」

「あっ、私も……好き」

「ちよつと！ちよつと！いつちゃんと志歩ちゃんだけ、ずるい！

アタシだって、龍馬くんのこと、好きだよ？」

「だから、俺は穂波しか、愛せない」

「フフツ、龍馬くんらしいね」

「やれやれだぜ……」

4人に振り回されるデートは、始まったばかり。



## 第十六話 龍馬のテニス指導

とある、テニスコートにて、

龍馬が咲希に対して、テニスの指導をしていた。

「龍馬くんコーチ！」

今日も、ご指導ご鞭撻のほど、

よろしくお願いいたしますっ！」

「龍馬くんコーチって…」

まあ、教えてもいいが、

俺は、テニスを絶対、

それも、一切、実際に、やらねーからな」

「わかりました！」

龍馬はベンチに座り、

咲希にテニスのテクニクや技を教えた。

「いいか、俺のようなプロのテニスは、

もっと、次元の高い世界観だ。」

それに、食らいつくんだ。いいな？」

「はいっ！わかりました！」

「よし、まずは…」

龍馬は、硬式テニスの、やり方としてのの、基礎を、口頭で、咲希に言って、

叩き込まました。

「まずは…」

龍馬は咲希に対して、

ワンバウンドでボールを打つ「ストローク」、

ノーバウンドでボールを打つ「ボレー」、

ラリー中に頭上でボールを打つ「スマッシュ」を、

口頭で教えた。

「よし！やるぞー！」

テニスの練習後…

「龍馬くん！咲希ちゃん！」

「ほなちゃん！」

「はい、二人とも、お昼だから、

お弁当作って来ちゃった！」

「わーい！ほなちゃん料理、

アタシ、大好きなんだよね〜！」

「俺も穂波の手料理、好きだぜ？」

「じゃあ！はい！龍馬くん！あ〜ん！」

と、咲希は龍馬に対して、お弁当を食べさせようとしていた。

「おいおい、俺にそんな趣味はねーよ」

「ひよつとして、ほなちゃんに、

やってもらいたいのか？」

「だから、違う！」

「ほらほら！ほなちゃんも！龍馬くんが腹ペコだよ？

食べさせない？」

「龍馬くんは、自分で食べると思うけど…」

「ああ、穂波の言う通りだぜ」

と、黙々と、龍馬は穂波お手製のお弁当を食べた。

「美味しいぜ」

「よかった〜それなら、作ったかいがあったわ」

「もーう！アタシも、好きな人にご飯食べさせて、

青春がしたいーい！」

「それは、咲希のやりてーことだろ？」

「そうだよー！はいっ！」

アタシだって、龍馬くんのこと、好きだったんだよ〜？」

「咲希ちゃんには、一歌ちゃんがいるような…」

「そうだった！」

アタシ、やりたい100のこの最後に、

いっちゃん結婚するって、書いていあるんだった！」

「そ、そうなのかよ…」

「アタシ、結婚するなら、龍馬くんか、いっちゃんがいいの！

でも、龍馬くんは、ほなちゃんと、結婚するからなく！」

「そ、そうだけど…実際に、婚約者だし…」

「そうだ。俺と穂波は、一応は、婚約者だ。

お弁当を食べたら、再開するぞ？」

「は〜い！」

その後、龍馬からの猛指導が入り、

咲希は、クタクタになるのだった。

## 第十七話 龍馬はテニスのコーチ

テニスコートにて。

今日も天馬咲希は、結城龍馬からテニスを教わっていた。

龍馬自体は、精神的にも気持ち的にもテニスをしたくない為、咲希の専属？テニスコーチをしていた。

「前より上手になってるじゃねーか」

「ホントですか!?! 龍馬コーチ!?!」

「ああ、これなら、十分試合でも通用するかもな」

「よーし！身体が病弱でも、負けないぞー！頑張るぞー！」

咲希はやる気満々だ！

「よし、今日はおきのおきの飲み物を持ってきた」

「えっ……あの龍馬くんが言っていた、アレ!?!」

「いや、咲希が飲みやすそうだなと思って、

フルーツのスムージーにした。穂波特製だ」

「ほなちゃんか!?! やったー!?!」

穂波の作ったフルーツスムージーには、イチゴとマンゴーが入っていた。

「うーん！美味しい！ほなちゃんに後でお礼を言わないと！」

「おい、少し休憩したら、また練習するぞ？」

「はい！コーチ！ビシビシやっちゃってくださいっ！」

「ああ、その意気だ」

その後も、熱心に咲希にテニスの指導をするのだった。

「よし、身体づくりも大切だから、そこも意識しろよな？」

「はい！」

「練習試合がしたいが、もう一人いたらな」

「そーだね…龍馬くんって、何度言ってもテニスはやらないって言うし…」

「友達がいるだろ？そいつ等に頼めばいいじゃねーか？」

「うーん…アタシのいっちゃんがいいな」

あつ、えむちゃんでもいいな」

「ああ、ぜひ、練習試合の時に誘ってくれ」

「龍馬くんって、いかにもコーチって感じだね！」

「そ、そうか？」

「うん！アタシを指導している時、すっごく熱心に指導してくれているから！」

「そ、そうか…咲希の呑み込みが早いし、

俺の指導も気合が入っているかもな」

「また、テニスやりたいんじゃないの？」

「もうやらねーよ。自分はもうテニスをやるような選手じゃねー

テニスだけはな。だが、教えることは、いくらでも教えてやりてー」

「そっかーでも、いつか、龍馬くんのテニスやっている姿、

見て見たいな！」

「ああ、約束は出来ねーが、その時が来るのか…？」

「ねえねえ、実は公園に捨て猫がいるんだけど…

龍馬くんって、ネコ得意？」

「ああ、ネコを飼ったことがある。黒猫のペコだ。

少し時間がかかるが、実はネコの言葉がわかったりする」

「すごい！龍馬くんって、ネコと心が通わせれるんだ！」

「自慢じゃねーけどな」

「でも、テニスも出来て、ネコの言葉がわかるって、

すごいことだよ！」



「俺に言わせたら、大したことじゃねー」  
と、龍馬は照れだしていた。